

## 状況陰題文とは何者？<sup>†</sup>

丹 保 健 一\*

### 〈要 旨〉

佐治氏の命名になる「状況陰題文」は、題述文の一つというより、状況に深く係わりを持つ特殊な存現文、強いて名付ければ、「状況存現文」とでもいうべき性格を持つ文である。

というのは、状況陰題文における「状況」は、判断の対象としての主題というより、表現、理解のための無意識の前提として働いているにすぎないからであり、又、状況陰題文の述語が持つ判断作用は、文末の感動表出によりコト的なものとして収まると考えられるからである。

### 〈1〉 はじめに

佐治氏によって、状況陰題文と名付けられた一連の文がある。それらの文の特性、文の表現類型上の位置については既に氏自身による論考がある。しかし、釈然としない点も見られる。

本稿は、状況陰題文の特性を、佐治氏の考え方に導かれつつ、かつ又、その考え方を検討していく中で明らかにしようとするものである。

### 〈2〉 状況陰題文とはどのような文を指しているのか。

佐治氏自身がどのような文を状況陰題文としているのであろうか。紹介することから始めよう。

形容詞文にも

㉞山が美しい。

の形の文がある。この文は転位・陰題の文「(美しいのは) 山が美しい。」であり得るほかに、「そのあたりはどうですか?」といった質問の答でもあり得る。ということは、㉞は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形・無形の種々の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出して判断を表したものだとして理解できるということである。言いかえれば、㉞のような文は、その全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れないところの陰題の文であると把握できるのである。この種の文を「状況・陰題」の文と呼ぶことにする。

〔状況〕 — 〔山が美しい。〕

(佐治 1972「題述文と存現文」116p)<sup>(注1)</sup>

従って㉟(「山が見える。」を指す。引用者注)は、形容詞文の場合と同様、状況に対してその状態の存在を認知した、状況・陰題の文とも言えるのである。

〔私・我々は〕 — 〔山が見える。〕

<sup>†</sup> 原稿受理日 昭和62年10月15日

\* 三重大学教育学部

(見えるのは) — 山が見える。

(状況) — 山が見える。

(佐治 1972 「題述文と存現文」 118 p)

⑩山があるのだ。

⑪雨が降るだろう。

⑫犬が猫を追っかけているようだ。

これらはすべて状況・陰題の文になっていると思うのである。さらに、否定や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文にしてしまうようである。

⑬山がない。

⑭雨が降っていますか。

(佐治 1972 「題述文と存現文」 119 p)

なお、佐治 (1975, a) には、例文「山がない。」「雨が降っていますか。」は、次のように示されている。

⑩ (状況) — 山がない。

⑪ (状況) — 雨が降っていますか。

(佐治 1975, a 「日本語構文の特質—主語と述語、主題、主格など—」 90 p)

⑫ (「富士山が美しい。」を指す。引用者注) は、転位陰題の文として、「美しいのは、富士山が美しい」の意であり得るとともに、例えば、列車の窓から景色を眺めていて、美しい富士の姿がふと目に入ったときに思わず口をついて出たような文でもあり得る。この種の文は、情景描写の文とか、眼前描写の文とか呼ばれるものであるが、時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として、その状況の内に含まれるある属性的要素を取り出して述べる文、言いかえれば、状況を陰の主題として、その属性を述べる文だと考えることができるので、この種の文を、状況陰題の文と呼ぶことができるであろう。(佐治 1982 『「は」及び「が」の使い分け」 448 p)

陰題の文には、右のほかにも、その場の状況が問題＝主題となっているような文もある。

⑬ 月がきれいですね。(状況) — 月がきれいですね。

このような文を筆者は「状況陰題」の文と呼ぶことにしている。

⑭はだれかと夜道を歩いているような時に出てくる文であるが、—以下略—

(佐治 1984 「外国人にはどうしてハとガの使い分けが分からないのか」 85 p)

以上示したように、氏は状況陰題文の具体例として次のような文を挙げている。

「山が美しい。」「山が見える。」「山があるのだ。」「雨が降るだろう。」「犬が猫を追っかけているようだ。」「山がない。」「雨が降っていますか。」「富士山が美しい。」「月がきれいですね。」

しかし、これらの文が常に状況陰題文として働くわけではない。それは、例えば「山が見える。」において、氏が、(私・我々は) —山が見える。(見えるのは) —山が見える。(状況) —山が見える。の可能性を示している如くである。

上に列挙した文には、「状況を主題としている」か否かといった規定によるものが多い。し

かし、このような規定によっている例文を分析の対象とすることは、状況陰題文とは何かを探る目的からすれば矛盾をきたすことになる。なぜなら、状況陰題文の定義が「状況を陰題とする文」なのであるから。

状況を陰題に持つという規定によらないものとしては、「そのあたりはどうですか？」といった質問の答としての「山が美しい。」、列車の窓から景色を眺めていて、美しい富士の姿がふと目に入ったときに思わず口をついて出たような文としての「富士山が美しい。」の二文が考えられよう。しかし、このうち、「そのあたりはどうですか？」といった質問の答でもあり得る文（「山が美しい。」）は、顕題の題述文とすべきものであり、略題がたまたま状況であるにすぎないと考えられる。つまり、顕題の略題題述文としてよいものである。

そこで、本稿では、次のような文を考察の中心的な対象として論を進めていくことにしたい。

ふと目に入ったときに思わず口をついて出たような種類の文としての  
『富士山が美しい。』

### 〈3〉 題述文と存現文

佐治氏の状況陰題文に対する考え方を見る前に、論の煩雑さを防ぐ意味で、氏の題述文及び存現文に対する考え方を紹介しておきたい。ここで題述文、存現文について紹介するのは、状況陰題文を検討する際に、何故状況陰題文を題述文に含めるのか、言いかえれば何故存現文に含めないのかが問題となってくるからである。

氏の題述文、存現文に対する考えかたは主として、佐治 1972 に見ることができる。

述語文は事物・現象の存在を表す存現文と、主題とそれに対する解説の部分から成る題述文とに別れる。一中略一名詞文、形容詞文はつねに題述文である。一中略一また存現文は常に確言・肯定の平叙文である。  
(佐治 1972 「題述文と存現文」 111～112 p)

他者たる不特定の多数が、外から直感的に認知することのできないものだから、題述文にならざるを得ない。  
(佐治 1972 「題述文と存現文」 118 p)

「ある」の場合は、話し手が「ある」とすることは、話し手と同じ位置を占める多者に通じるものであると同時に、そこに居合せない人にも、盲目の人にも同様に言えるはずであり、全体者に通じる形で「ある」のである。かくして「山がある。」は、話し手の何かに対する判断ではなくして、「山がある」ことそのことが、客観的な事実として言いたてられているのである。それは、もはや状況に対する判断などではなく、状況は彼方にかすんでしまって、意識から消え去り、物事の存在そのものが前面に出てきて、それを言いたてている文、つまり三上氏の「無題」の文である。「無題」という以上、それはもはや題述文とは認めないということである。

⑳雨が降っている。

㉑犬が猫を追っかけている。

についても同様のことが言える。  
(佐治 1972 「題述文と存現文」 118～119 p)

存現文は、以上の如く、叙述部だけでできている文であるが、その叙述の中心の述部がいろ

いろに変容しても存現文であることに変わりはないかという、そうではない。述語が過去の「た」になっても事情は変わらない。

㊸きのう、雨が降った。

が、確認の「のだ」や推量の表現が加わると様子が変わってくる。

㊹山があるのだ。

㊺雨が降るだろう。

㊻犬が猫を追っかけているようだ。

これらはすべて状況・陰題の文になっていると思うのである。さらに、否定や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文にしてしまうようである。

㊼山がない。

㊽雨が降っていますか。

(佐治 1972 「題述文と存現文」 119 p)

なお、佐治 (1975, a) には、例文「山がない。」「雨が降っていますか。」は、次のように示されている。

- ㊸ (状況) — 山がない。  
 ㊹ (状況) — 雨が降っていますか。

(佐治 1975, a 「日本語構文の特質—主語と述語、主題、主格など—」 90 p)

存現文は、事物、現象の存在を直感的に把握するものだから、確言の平述文でしかありえないようである。

(佐治 1972 「題述文と存現文」 119 p)

何かに対する判断を示しているのではなくして、客観的な事実として言いたてている—以下略—

(佐治 1975, a 「日本語構文の特質—主語と述語、主題、主格など—」 88 p)

以上の記述によって、佐治氏が題述文と存現文の別をどのように考えているかは、次のようにまとめることができよう。

#### 題述文

- (1) 主題 (話し手がそれについて解説すべき題目として提示したもの) を有する。
- (2) 直感的な把握をしない。(判断作用が働く。)
- (3) 他者たる不特定の多者に通じない。  
(他者たる不特定の多者が、外から直感的に認知出来ない。)

#### 存現文

- (1) 主題 (話し手がそれについて解説すべき題目として提示したもの) を有しない。
- (2) 事態・現象を直感的に把握する。(判断作用が働かない。)
- (3) 他者たる不特定の多者に通じる。  
(他者たる不特定の多者が、外から直感的に認知出来る。)

佐治氏が述語文を題述文、存現文に大別する場合において、まず問題となるのはビューラー、佐久間、三上、仁田等の言う、所謂「表出、訴え型の文」をどのように考えればよいかという

ことであろう。佐治氏の論考からは詳細に知ることは出来ないが、名詞文、形容詞文を常に題述文であるとし、「否定や意志や命令や疑問の表題も、文を題述文にしてしまうようである。」  
 「他者たる不特定の多者が、外から直感的に認知することのできないものだから、題述にならざるを得ない。」(佐治 1972「題述文と存現文」118 p) から推察すると、佐久間等の言う表出型及び訴え型の文の多くを題述文のなかに含ませているようである。表出型及び訴え型の文の表現類型上の位置についての検討は、本稿が扱っていることとも実は係わりを持っているのであるが、詳細は稿を改めることにしたい。

#### 〈4〉 状況陰題文の特質

##### 4.1 佐治氏の考え方について

氏は、状況陰題文の特徴及びそれについての考え方を、幾つかの論考を通して示している。  
 ③) での紹介と重複するものもあるが、略すとかえって分かりにくくなると思われる。いとわず挙げておく。

形容詞文にも

㉞山が美しい。

の形の文がある。この文は転位・陰題の文「(美しいのは) 山が美しい。」であり得るほかに、「そのあたりはどうですか?」といった質問の答でもあり得る。ということは、㉞は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形・無形の種々の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出して判断を表したものと理解できるということである。言いかえれば、㉞のような文は、その全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れないところの陰題の文であると把握できるのである。この種の文を「状況・陰題」の文と呼ぶことにする。

(状況) — 山が美しい。

(佐治 1972「題述文と存現文」118 p)

㉟山が見える。

になると、「山が見える。」という状態の存在の場所は時間的な限定を受けた空間的な場所である。従って「見える」のは「私」にとってと同時に、同じ位置を占める「我々」にとって「見える」のでもある。けれどもそれはすべての人(全体者)に見えるのではない。その位置を占めていない人、盲目の人には見えないはずである。従って㉟は、「山が見える状態にある」という事実の存在を言っているとともに、全体者でない多者たる我々に通じるはずのものとしての「私」が「見ることができる」ということの表現であって、客観的な状態の存在と同時にそれに対する話し手の認知の表現が、不可分の形で表現されたものである。従って㉟は、形容詞文の場合と同様、状況に対してその状態の存在を認知した、状況・陰題の文とも言えるのである。

(私・我々は) — 山が見える。

(見えるのは) — 山が見える。

(状況) — 山が見える。

(佐治 1972「題述文と存現文」116 p)

㊱山がある。

になると事情が違って来る。この文が題題の省略の文。転位・陰題の文であり得るのは言うまでもないし、また状況に対する陰題の題述文でもあり得るであろう。

(状況) — 山がある。

けれどもその判断の質が「見える」などとは違っている。「見える」の場合の話し手の認知は、全体者でないところの多者に通じるはずのものであったが、「ある」の場合は、話し手が「ある」とすることは、話し手と同じ位置を占める多者に通じるものであると同時にそこに居合わせない人にも、盲目の人にも言えるはずであり、全体者に通じる形で「ある」のである。かくして「山がある。」は、話し手の何かに対する判断ではなくして、「山がある」ことそのことが、客観的な事実として言いたてられているのである。それは、もはや状況に対する判断などではなく、状況は彼方にかすんでしまっ、意識から消え去り、事物の存在そのものが前面に出てきて、それを言いたてている文、つまり三上氏の「無題」の文である。「無題」という以上、それはもはや題述文とは認めないということである。

⑳雨が降っている。

㉑犬が猫を追っかけている。

についても同様のことが言える。

(佐治 1972「題述文と存現文」118～119 p)

存現文を図示すれば、次の如くであろう。

山がある。

雨が降っている。

犬が猫を追っかけている。

存現文は、以上の如く、叙述部だけでできている文であるが、その叙述の中心の述部がいろいろに変容しても存現文であることに変わりはないかということ、そうではない。述語が過去の「た」になっても事情は変わらない。

㉒きのう、雨が降った。

が、確認の「のだ」や推量の表現が加わると様子が変わってくる。

㉓山があるのだ。

㉔雨が降るだろう。

㉕犬が猫を追っかけているそうだ。

これらはすべて状況・陰題の文になっていると思うのである。さらに、否定や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文にしてしまうようである。

㉖山がない。

㉗雨が降っていますか。

(佐治 1972「題述文と存現文」119 p)

なお、佐治 (1975, a) には、例文「山がない。」「雨が降っていますか。」は、次のようになっている。

㉘ (状況) — 山がない。

㉙ (状況) — 雨が降っていますか。

(佐治 1975, a「日本語構文の特質—主語と述語、主題、主格など—」90 p)

㉚(「富士山が美しい。」を指す。引用者注) は、転位陰題の文として、「美しいのは、富士

山が美しい」の意であり得るとともに、例えば、列車の窓から景色を眺めていて、美しい富士の姿がふと目に入ったときに思わず口をついて出たような文でもあり得る。この主の文は、情景描写の文とか、眼前描写の文とか呼ばれるものであるが、時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として、その状況の内に含まれるある属性的要素を取り出して述べる文、言いかえれば、状況を陰の主題として、その属性を述べる文だと考えることができるので、この種の文を、状況陰題の文と呼ぶことができるであろう。（佐治 1982 『『は』及び『は』『が』の使い分け』448p）

陰題の文には、右のほかに、その場の状況が問題＝主題となっているような文もある。

⑩月がきれいですね。〔状況〕 — 月がきれいですね。

このような文を筆者は「状況陰題」の文と呼ぶことにしている。

（佐治 1984 「外国人にはどうしてハとガの使い分けが分からないのか」85p）

以上紹介してきたことを、「富士山が美しい。」を例として分かりやすく示すと次のようになるろう。

「富士山が美しい。」

「美しい」は形容詞である → 題述文

「美しい」は判断を示す → 題目が存在するはず → 題述文

題目が不明瞭 → 状況そのものが陰題 → 状況陰題文

全体者に通じない → 題述文 → 同じ位置（時空・状況）を占める者には通じるという一般の判断文にはない性格を持つ → 状況陰題文

## 4.2 状況陰題文の検討

4.1で示した佐治氏の考え方を、次の三点から検討していくことにしたい。状況陰題文（「富士山がうつくしい。」）は、①題述文なのか。②状況とどのような関連性を持っているのか。③「同じ位置（時空）を占める者には通じる」ということが題述文及び存現文とどのような関係を持つのか。

### 4.2.1 状況陰題文は題述文か

第一の視点である、状況陰題文は題述文に属するとしてよいのだろうかという問いから、つまり、目にはいったときに思わず口をついて出たような文（「富士山が美しい。」）は、佐治氏のいう題述文の基準に合致するのだろうか。主題を有するのだろうか。直感的な把握はしていないのだろうか。判断作用があるのだろうか。といった問いから始めていくことにしよう。

ふと目に入ったときに思わず口をついて出たような種類の文（「富士山が美しい。」）は、「おもわず」とあるように「無意識」に表現した文であるということができる。この点で感動詞（注、佐治氏は感動詞や所謂一語文を独立文としている。佐治 1974 「係り結びの一側面」）に近いものと言えよう。近いものであるとしたのは、違いがあることを認めるからである。「あっ！」や「いたい！」とはやはり違うのである。思わず口をついて出た「富士山が美しい。」は、「富士が美しい」という現実の事象を感覚的に認知し、その印象をそのままに、現実

の事象に情意を添えて表出している文である。「あっ！」や「いたい！」には現実の事象は表現されていない。表現されているのは情意の表出だけである。いずれにせよ題目は意識されていない。題述文ではないと考えてよからう。

しかし、次のような反論が考えられる。それでは、思わず口をついて出た「富士山は美しい。」には題目がないのか、といったものである。同じ思わず口をついて出た文であっても、「富士山は美しい。」と「富士山が美しい。」が存するのからである。このような疑問に対しては、次のように答えることができる。つまり、思わず口をついて出た「富士山は美しい。」は、「富士山は美しい。」と言われていた（思っていた）が、やはり「富士山は美しい。」の意であり、「富士山は美しい。」という判断の確認に情感を添えて表現しているのである。判断の判断とすることができよう。一般的、或いは典型的な判断文ではないがやはり題述文、判断文に属するものと言えよう。

それでは、ふと目に入ったときに思わず口をついて出たような種類の文（「富士山が美しい。」）は、題目が無いと単純に言い切れるのだろうか。佐治氏の言葉を借りれば、「事態・現象を直観的に把握したもの」なのであろうか。佐治氏の自身が言う、「話し手の何かに対する判断ではなくして、『山がある』ことそのことが、客観的な事実として言いたてられているのである。それは、もはや状況に対する判断などではなく、状況は彼方にかすんでしまって、意識から消え去り、事物の存在そのものが全面に出てきて、それを言いたてている文、つまり三上氏の『無題』の文である。『無題』という以上、それはもはや題述文とは認めないということである。」（佐治 1972「題述文と存現文」118～119p）と考えられるのであろうか。又、違いがあるとすればどこにあるのだろうか。さらに具体的に言えば、「犬が猫を追っかけているよ。」「あっ、水が出た。」と思わず口をついて出た「富士山が美しい。」とはどのように違うのであろうか。

確かに、「犬が猫を追っかけている」姿を見て、そのまま「犬が猫を追っかけている（よ。）」という場合、又、突然、水が出てきたのを見て「あっ、水が出た。」と発する場合の何れも題目（主題、課題）は意識されていない。判断ではなく直感によって把握された内容をそのまま表現したものといえる。

それでは思わず口をついて出た「富士山が美しい。」はどうだろうか。これらの文も又、佐治氏が、これらは一般に眼前描写の文と呼ばれていると指摘しているように題目が意識されている文とは思われない。しかし、存現文との違いも無視できない。「犬が猫をおっかけている。」「あっ、水が出た。」といった存現文が事態・現象を直感的に把握（認知）し、そのまま表現したものとすれば、そこには（狭義の）判断作用は働いていない。だが、思わず口をついて出た「富士山が美しい。」には題目は意識されなくても、判断作用に類するものが働いていないと言い切れるのだろうか、といった疑念が残ろう。それは、「美しい」「きれいだね」が現実世界そのものではなく、人間の側から出るものであり、そこには何等かの判断作用（存在の判断を超えた判断）を含むものと考えられるからである。単に在るものが在る、それをそれと認知・判断するものと考えられないからである。

このように見てくると、状況陰題文においては、題目は意識されない、しかし判断作用との係わりはある、という矛盾が含まれることになる。（注；このような現象に注目し、「状況」との関連において最初に説明したのが佐治氏ということになる。）

このような矛盾は、次のように考えることによって解決できるように思われる。一言で言え



ば、「おかれている状況を前提（題目ではない）として感覚的に据えた（広い意味で判断した）印象をそのまま表現したものが状況陰題文である」。少しく説明しておこう。「状況を前提にして」と言った場合の前提は、転位陰題文でいう場合の「旧情報を前提にして」といった場合と異なる。転位陰題文では「求められているもの」がある。しかし、思わず口をついて出た「富士山が美しい。」においては、決して前面に現れることがなく、意識にも上らないものである。無意識に前提としていってもよいものである。話手は状況を主題（課題、題目）にしている訳では決してない。「富士山」の様子、「月」の様子を認知、表出しているのである。さらに大切なのは、伝達される内容は所謂「コト」ではなく、判断を内に含みながらものを、それを「コト」（現象・事態）の如くに表出しているということである。

このように考えることによって、「美しい」の持つ判断性、情意性、そして、状況陰題文の無題性が矛盾なく説明できるように思われる。

しかし、また一方で、転位陰題文も題述文に属さないのではないかとする見方もでてこよう。だが、転位陰題文の場合は、やはり課題を予め特定でき、また意識していると考えられるのであるから、題述文とすることにそれほど問題はな思われる。

以上のように説明することによって、判断性と無題性との矛盾は一応解決できよう。しかし、文型論上の位置付けは必ずしも単純でないことも指摘しておかねばならない。なぜなら、状況陰題文は題述文、存現文両者の特質を内に持つからである。

#### 4.2.2 状況との関連について

さて次に、第二の視点である「状況との関連性」について考えていくことにしたい。佐治氏は、状況陰題文と状況との関連については次のように述べている。

この種の文は、情景描写の文とか、眼前描写の文とか呼ばれるものであるが、時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として、その状況の内に含まれるある属性的要素を取り出して述べる文、言いかえれば、状況を陰の主題として、その属性を述べる文だと考えることができるので、この種の文を、状況陰題の文と呼ぶことができるであろう。

（佐治 1982 『『は』及び『は』『が』の使い分け』 448 p）

氏の考え方の中で問題となるのは、「時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として」の「基とし」「前提として」と、「状況を陰の主題として、その属性を述べる文だ」の「主題として」とがイコールで結び付くのかという点である。確かに「時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として」は鋭い指摘であり、状況陰題文の特質をついているものと思われる。しかし、それが即「状況を陰の主題として」と結びつくとは思われないのである。というのは、氏自身の言葉を借りれば、主題とは「話し手がそれについて解説・説明すべき題目として提示したものである。」（佐治 1972）ということができるからである。そして陰題とは、話し手が題目とし提示しているにもかかわらず「～は」の形で表に現れ得ないもの（少なくとも自然な文としては）であるといえよう。転位陰題文がそれである。

ここで問題となるのは、状況が本当に主題となっているのかということである。先にも触れたように、状況が意識されることがないのであるから、むしろ無題の文に近いと考えるのが適切であろうと思われるのである。状況と状況陰題文との係わりは佐治氏が述べるように、「時間・空間の一定の場所を占め、あたりの情景や話し手、聞き手等をも含み込んだ状況を基とし、その状況を前提として」（佐治 1982）文の成立に係わっていると考えたのである。誤解を恐れずに言えば、状況陰題文において状況は「コト＋ムード」の「コト」の形成に係わっているのである。

状況陰題文形成における状況の役割・位置については以上の指摘に止め、次に残された問題である「同じ位置（時空）を占める者には通じる」という点について、つまり、状況陰題文を典型的題述文（判断文）及び存現文（現象文）から分かち特質について考えいくことにしたい。

#### 4.2.3 「同じ位置を占める者には通じる」について

氏は、題述文については、「他者たる不特定の多者が、外から直感的に認知することのできないものだから、題述文にならざるを得ない。」（佐治 1972、118 p）、又、存現文については、「『ある』の場合は、話し手が『ある』とすることは、話し手と同じ位置を占める多者に通じるものであると同時にそこに居合せない人にも、盲目の人にも同様に言えるはずであり、全体者に通じる形で『ある』のである。かくして『山がある。』は、話し手の何かに対する判断ではなくして、「山がある」ことそのことが、客観的な事実として言いたてられているのである。」（佐治 1972、118 p）と述べているように、題述文は話し手個人の判断によるもの、存現文は話し手個人の判断によらないものとしている。そして、状況陰題文は、その場にある者には通じ、その場には通じないという特質を持ち、典型的題述文及び存現文と各々異なるものとしているのである。

さて、ここで、氏の言う「通じる」「通じない」とはどのようなことを言っているのだろうか。見ておくことにしよう。

氏は、佐治 1972 において次のように述べている。

⑩私は故郷のことが思われる。

⑪私は山が見える。

⑫あの方はスキーができる。

⑬あの方は子どもがある。

これらの文は、ある種の状（情）態の存在を認知するものだけということができるのではなからうか。これらの文の主題の部分は、「～には」とも言えることからわかるように、その状（情）態の存在の場所を示すものだけといえる。そして、その場所が、有情の個者の心中、感覚でしかあり得ない場合は、その状（情）態の存在を認知する者もその個者でしかありえず、他者が認知することはできない。—中略—⑩～⑬は、いずれも、その存在の場所を個者の内に有する「気持」「能力」など、無形のもの状態存在であって、他者たる不特定の多者が、外から直感的に認知することのできないものだから、題述文にならざるを得ない。

（佐治 1972 「題述文と存現文」 117～118 p）

このような記述から、「通ずる、通じない」は、「直感的に認知できる、できない」の意味で

あり、その対象は文に表現されている内容であるということができよう。「山がある。」等は、直感的に認知でき、「個者の内に有する」判断・情意などの「無形のものの状態的存在」は直接的に認知出来ないと考えているのである。

以上のようにみえてくると、「うつくしい」は形容詞であり、個者の判断であるとする氏の考え方は、「その場のいる者には通じる」と矛盾を生むことになると思われる。なぜなら、「うつくしい」が、個者の判断を示すと考えれば、それは、すでに多者の認知から離れた所に存するからである。

このような矛盾は、佐治氏が、「うつくしい」は形容詞であり、「判断」を示し、題目を持つ、そして、その判断は話し手個人から出たものであり、他者が直感的に認知できないものである、としたところから生じていると思われる。

それでは、「その場にいる他者には通じない・認知できない」という指摘は全く見当外れな指摘なのであろうか。少しく考えてみたい。

氏は、「他者が直接的に認知できないもの」としては、具体的には、「確認の『~のだ』や推量の表現が加わると様子が変わってくる。(題述文になるということ述べている。引用者注)」「否定や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文にするようだ。」(佐治 1972、119p)とあるように、確認、推量、否定、意志、命令、疑問などの表現を考えているようである。これらは確かに話し手の内から生ずるものであり、他者からは直接的に認知できないものであろう。だが、状況陰題文「富士山がうつくしい。」においては、本来他者が直接的に認知できないはずのものなのに、あたかも存在文のように、直接的な認知ができるとし、そのような認知を可能たらしめているのが「状況」であると考えているのである。

このような考え方の内部矛盾については既に指摘した通りであるが、状況陰題文の特性の一面を鋭く言い当てているとも言えなくはない。先に示した矛盾を次のように説明すればそれが理解されよう。

話し手がおもわず「富士山がうつくしい。」と言っているときの「うつくしい」は「熱い!」「痛い!」と同様、題目を意識しているわけではなく、情意の直接的表出とでもいうべきものである。その点で名詞文(「彼は学生だ。')や形容詞文(「地球は丸い。')等でいう判断と性質を異にしている。つまり、状況陰題文(おもわず口にした文「富士山がうつくしい。')における「うつくしい」は題目を前提としていないのである。

#### 〈5〉 状況陰題文(「富士山がうつくしい。')の特性

以上、佐治氏の考え方を検討して来たのであるが、その中で状況陰題文の特質が次第に明らかになってきたように思われる。まとめておこう。

- (1) 状況陰題文(おもわず口をついて出た『富士山がうつくしい。』)は、「状況」を主題にしている訳でなく、「状況」を表現・理解の(無意識の)前提としている文である。
- (2) 状況陰題文(おもわず口をついて出た『富士山がうつくしい。』)における述語形容詞『うつくしい』は、「属性」を表すとともに、話し手の「情意(感動)」をも表している。この「感動」の表出が、主題を要しない文を可能たらしめていると考えられる。
- (3) 状況陰題文(おもわず口をついて出た『富士山がうつくしい。』)は、述語文を題述文、存現文に大別すると、存現文に近いものということが言えよう。しかし、一般の存現文と異なり「状況」を表現・理解の無意識の前提としており、その点では、題述文とあい通じ

る側面を持っていると言えよう(注2)。

注

(注1) 引用文献のページ数はそれが掲載されている文献の通しのページ数を示す。

(注2) 感動を表す文全体の整理が必要である。今後の課題である。

〈引用及び参考文献〉

- 山田 孝雄 (1936) 『日本文学概説』  
 松下 大三郎 (1928) 『改選標準日本文法』  
 同 (1930) 『標準日本口語法』  
 中島 文雄 (1939) 『意味論』  
 佐久間 鼎 (1940) 『現代日本語法の研究』  
 同 (1941) 『日本語の特質』  
 同 (1959) 『日本語の言語理論』  
 三尾 砂 (1948) 『国語法文章論』  
 三上 章 (1953) 『現代語法序説』  
 同 (1958) 「基本文型論」(『国語教育のための国語講座』)  
 同 (1959) 『新訂版現代語法序説』(『統現代語法序説』)  
 同 (1960) 『象は鼻が長い』  
 寺村 秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 I』  
 同 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』  
 佐治 圭三 (1957) 「終助詞の機能」(『国語国文』第6巻7号)  
 同 (1972) 「題述文と存現文」(『大阪外大学報』29)  
 同 (1974) 「係り結びの一側面—主題(部)・述部に関連して—」(『国語国文』43-5)  
 同 (1975, a) 「日本語構文の特質—主語と述語、主題、主格など—」(『国語シリーズ別冊  
 2日本語と日本語教育—文法編—』文化庁)  
 同 (1975, b) 「現代語の助詞『も』—主語・述語(部)、『は』に関連して—」(『女子大文  
 学・国文編』26)  
 同 (1980) 「文法理論・現代」(『国語学』第121集)  
 同 (1982) 「『は』及び『は』と『が』の使い分け」(『日本語教育事典』446~452p)  
 同 (1984) 「外国人にはどうしてハとガの使い分けが分からないのか」(『国文学』29-9)  
 尾上 圭介 (1973) 「文核と結文の核」(『言語研究』63号)  
 仁田 義雄 (1980) 「文の表現類型」(『語彙論的統語論』)  
 同 (1986) 「現象描写文をめぐって」(『日本語学』1986, 2月号)  
 丹保 健一 (1985) 「『ガ』『ハ』の使い分け—新・旧情報をめぐって—」(『金沢大学語学・語文研  
 究』第14集)  
 同 (1986, a) 「係り助詞『は』の理解」(『日本語学』1986, 2月号)  
 同 (1986, b) 「大阿蘇の『が』『は』再考」(『月刊国語教育』1986, 8月号)  
 同 (1987) 「『月がきれいですね。』の文法—『が』『は』使い分けの語彙、語用的条件—」  
 (『三重大学教育学部研究紀要 第38巻』(人文・社会科学))